

バスケットボールプラザ

Basketball Plaza

No.103



2025年12月

NPO 法人 日本バスケットボール振興会

第16回シニアバスケットボール交歓大会2025 in Yoyogi

期日:2025年10月29日(水)、30日(木) 場所:代々木第2体育館

<参加チームの皆さん>



横浜ビーシーガールズ・Tigre Azzuro



レイダース・駄馬



COKI-COKI・FREEDOME G



岩手マスターズ・STARS OF STARS



セブンブラザーズ・岡山・広島連合



MYC・代々木ガールズ



シルバーキッズ・福岡ピンクパンサー



長野クラブシニア・MYC

目 次

○ 令和7年度活動中間報告	事務局	2
— 通常総会の報告と現状及び今後の活動報告 —		
○ 新入会員募集活動実施報告	事務局	4
○ 令和7年度新入会員・自己紹介	事務局	6
○ 令和7年度秋季講演会講演録	谷釜 尋徳	9
観客はどのようにバスケットボールを変えてきたのか？		
○ 第16回シニアバスケットボール交歓大会		
2025 in YOYOGI を終えて	普及部	12
○ 最近の我が国バスケットボール界の動向	普及部	14
○ 全国各地のシニアバスケットボール大会	普及部	16
◆第31回北海道ゴールデンシニアバスケットボール交歓大会		
◆第3回エール杯(岡山大会)		
○ WORLD MAXI Basketball Championship 2025		
参戦報告	上田 健二	18
○ 最近の競技規則について	小澤 正博	20
○ 群馬県バスケットボールのあけぼの	歴史部	22
— 群馬県のバスケットボール普及の流れ —		
○ 【先人の軌跡】「リーグ戦をやりたい」100年前の思い	歴史部	24
— 100年の歴史を超える関東大学バスケットボール連盟 —		
○ ~新たな100年へ~	吉見 敬一	28
関東大学バスケットボール連盟		
○ 会員だより	須田 武志	30
嘘のような、本当にあった話(特別編、その11~)		
○ 訃報		38
○ 大野龍一君を悼む	都崎 修男	38
○ 事務局だより	事務局	39
○ プラザ こぼればなし		40

令和7年度活動中間報告

— 通常総会の報告と現状及び今後の活動報告 —

[事務局]

[通常総会の報告]

令和7年度通常総会（本人出席とはがきによる書面決議）を7月11日に開催
総会員数の137名 出席会員数 89名（本人出席 24名、書面決議 65名）
総会員数の過半数69名を上回っており、総会は有効に成立
定款24条の規約により諸山会長が議長に着任

1、 審議事項

- (1) 議長の選任
- (2) 第一号議案 令和6年度事業活動報告
- (3) 第二号議案 令和6年度事業会計収支報告
- (4) 第三号議案 同上 監査報告
- (5) 第四号議案 令和7年度事業活動計画（案）
- (6) 第五号議案 令和7年度事業会計予算（案）

2、 議事の結果

上記事項を審議し、総会出席者の賛同を得てすべて提案通り承認された。

3、 その他 池本祐一郎理事の副理事長就任を報告（6/20 理事会で承認）

「事業報告書」を東京都管理法人課に提出し、収受されていることを報告

[令和7年度活動報告] （2025年4月～2025年12月）

4月23～24日 シニアバスケットボール交歓大会 in 白子

各チームの代表者にシニア大会のあり方について意見交換を行う。

5月13日 振興会のあり方検討委員会/会長、副会長、理事長、副理事長など

5月18日 「京都府バスケットボール協会設立100周年記念式典」出席

5月27日 振興会のあり方検討委員会/会長、副会長、理事長、副理事長など

6月17日 「令和6年度 事業活動・事業会計」 監査

6月20日 「令和7年度通常総会資料」（案）理事会にて審議・承認

「令和7年度通常総会資料」（案）、「賛否回答用はがき」を会員に発送

7月1日 「バスケットボールプラザ N0.102」発行

7月11日 令和7年度通常総会・懇親会開催 於 コンフォート水道橋

8月12～18日 事務所夏季休暇

9月27日 第31回北海道ゴールデンシニアバスケットボール交歓大会 札幌大会

9月27～28日 第3回エール杯スーパーゴールデンプラチナシニアバスケットボール
岡山大会

10月29～30日 第16回シニアバスケットボール交歓大会2025 in 代々木 開催

11月10日 神奈川県バスケットボール協会への講習会開催の依頼
半田会長、U-12 牧野部会長、U-15 五十嵐部会長面談
出席： 諸山、小澤、蒲田 3名

11月 東京都バスケットボール協会（橋本会長）への講習会開催の依頼

11月20日 秋季講演会（講師）谷釜尋徳東洋大学法学部教授・懇親会 開催

11月29日 横浜文化体育館で開催される「B2 横浜エクセレンス」の前座として
70歳以上の男子シニアチームのエキビジョンマッチを行う。

12月6日 関東ゴールデンシニアバスケットボール連盟主催トーナメント第1戦に
シニア女子チーム4チーム参加 場所：藤沢市秩父宮記念体育館

12月12日 理事会

12月26日 「バスケットボールプラザ NO.103」発行

以上

新入会員募集活動実施報告

[事務局]

岡山・エール杯で会員募集の活動をしてきました

9月26日・27日、岡山市のジップアリーナ岡山で第3回エール杯が催され、全国からスーパーゴールデン（65歳以上）、プラチナゴールデン（70歳以上）の計30チームが元気に集まりました。2日間の熱戦の末、65歳以上は大阪・ディノニクスが、70歳以上は山梨・ブラックパンサーが優勝しました。おめでとうございます。

日本バスケットボール振興会としては、大会主催者のご了解を得て、会員募集の活動をおこないました。普段はなかなかお会いすることが難しい沖縄などの遠方のチームの皆様ともお話をさせていただき、絶好の機会でした。各チームの責任者の方々に振興会の活動内容や理念をご説明させていただき、その場で入会いただいた方もいらっしゃいました。感謝申し上げます。



懇親会会場でマイクにより募集活動を行う池本（写真右）

今後、振興会としては、各大会に積極的に向いて指導者や責任者の方々にコンタクトさせていただき、会員募集をおこなっていくようにしたいと考えております。現在、会員の皆様におかれましても会員拡大に引き続きご協力を賜りますようお願いいたします。

（記：池本 祐一郎）

会員の皆さま 個人会員募集に関するご協力をお願いします

会員の皆様におかれましては良くご存じいただいておりますように、日本バスケットボール振興会の活動は会員の皆様の会費で支えられています。「振興会」として、法人会員（協賛企業・団体）の募集を積極的に進めてまいりますが、個人会員につきましてもより多くの方々に振興会の活動へのご参加をご理解いただき、一緒に「振興会」の活動を盛り上げてまいりたいと願っております。

是非、現在の会員の皆様におかれても、周りにおられるバスケットボールを愛好する方々へ「振興会」をご紹介いただき、個人会員の拡大にご協力をお願いいたします。

個人会員年会費 男子：1万円 女子：5千円

※ 個人会員の方でバスケットボール専門誌「月刊バスケットボール」を定期購読される場合は半額以下の年間4千円で購読が可能です。

是非、この機会に併せて購読を始められてはいかがでしょうか。

なお、「振興会」としては、個人会員とは別になりますが、活動されているチーム単位の会員登録についても検討をすすめておりますので、次年度には報告させていただきます。

個人会員・法人会員に関するお問い合わせ窓口

日本バスケットボール振興会 事務局（副理事長）池本 祐一郎 まで

電話&FAX (03) 5276-5801

メール contact@jbbs.jp

事務局は、原則毎週火曜日11時～16時の間、オープンしております。

時間外やお急ぎの場合はメールでご連絡をお願いいたします。

振興会のホームページは下記QRコードを読み込むことでアクセスできます。



振興会 HP

令和7年度新入会員・自己紹介

□ 令和7年度新入会員（2025年11月末時点）

氏名	ふりがな	入会年月	紹介者他
飯野 忠英 さん	いいの ただひで	2025年 4月	田中三夫さん
藤田 哲治 さん	ふじた てつじ	2025年 4月	川戸政角さん
田中 省三 さん	たなか しょうぞう	2025年 4月	今野庄さん
早川 通泰 さん	はやかわ みちやす	2025年 7月	川戸政角さん
城 尚史 さん	じょう たかふみ	2025年 7月	川戸政角さん
野村 昇司 さん	のむら しょうじ	2025年 8月	奥田恒男さん
大久保 有敬 さん	おおくぼ ありたか	2025年 8月	奥田恒男さん
小林 知子 さん	こばやし ともこ	2025年 8月	奥田恒男さん
奥本 謙荘 さん	おくもと けんそう	2025年 8月	城尚史さん
西野 十治 さん	にしの じゅうじ	2025年 8月	諸山文彦さん
川内 孝 さん	かわうち たかし	2025年 8月	諸山文彦さん
銘苺 光世 さん	めかり みつよ	2025年 8月	諸山文彦さん
春名 利紀 さん	はるな としのり	2025年 9月	シルバーキッズ一同
井土 正雄 さん	いづち まさお	2025年 9月	諸山文彦さん
熊木 毅 さん	くまき たけし	2025年 9月	池本祐一郎さん
鈴木 慎一郎 さん	すずき しんいちろう	2025年 9月	渡邊時男さん
那須原 知良 さん	なすはら かずよし	2025年 9月	早川通泰さん
荒井 親平 さん	あらい しんぺい	2025年 9月	池本祐一郎さん
熊原 信一 さん	くまはら しんいち	2025年 9月	池本祐一郎さん
牧野 広良 さん	まきの ひろよし	2025年 9月	小澤正博さん
奥山 基子 さん	おくやま もとこ	2025年 11月	小澤正博さん

□ 自己紹介



熊木 毅（くまき たけし）

新潟県出身、千葉県流山市在住、68歳、バスケットを愛する一人です。この度、尊敬する諸山先輩を慕って振興会に入会致しました。よろしく願いいたします。

バスケット経歴：中学（新潟県出雲崎中学校）よりバスケット始める。高校（新潟県立柏崎高校）、大学（京都大学）、社会人（丸紅）、を通じてバスケット部に所属。引退後はクラブチームでバスケット楽しんでます。現在は、セブンブラザーズ、ラスムチャチャス、に所属しています。

エピソード：

- ① 小学校では野球少年でした。肘を痛め野球が出来なくなり、卓球を始めるが、入部希望だった中学の卓球部が廃部に。残りの運動部はバスケット部しかなく、仕方なく入部しました。それが、これ程までバスケットと縁深くなるとは・・・。
- ② 丸紅時代は関東実業団一部に所属、日本リーグ入替戦（1988年）で見事勝利し、日本リーグ2部へ。メンバー登録されるが一度もコートに立つことなく引退しました。
- ③ 62歳で退職し単身赴任先から5年ぶりに自宅流山市に戻る。バスケット再開したが直ぐにアキレス腱断裂（右足）、3年後に再びアキレス腱断裂（左足）、それでもバスケット続け、家族からは呆れられ、見放されています。でも、仲間からは「アキレタ会へようこそ」と言われました。

以上



荒井 親平（あらい しんぺい）

今回、セブンブラザーズのメンバーからお誘いを受けて入会しました荒井です。

中学からバスケットボールを始め、高校、大学と部活動を続けてきましたが華々しい戦績は収めていません。高校時代に国体の千葉県選抜に選ばれましたが、大学受験のために辞退したことを今でも悔やんでいます。

東北大学を卒業後 10 数年ほどブランクがありましたが、千葉県鎌ヶ谷市に転居してから、地元のバスケットボール愛好者たちと週 1 回程度楽しいバスケットを続けてきました。また昨年、約 20 年間務めた鎌ヶ谷市バスケットボール協会の会長を辞し、今はあと何年できるかわからないバスケットボールを楽しんでいるところです。

バスケットボールを通して年齢、性別、職業を問わず、さまざまな素晴らしい人たちに出会えたことを心から感謝しています。

以上



熊原 信一（くまはら しんいち）

この度入会させていただいた熊原（千葉県船橋市在住 66 才）と申します。

S50 年、鹿児島県立鶴丸高校に入学し、「高校では勉強するんだ！」との決意もすぐ崩れ、身体がうずいてバスケット部に入部しました。中学同様、部活中心の楽しい生活を送り、頑張ったものの、3 年時県予選は 3 位でインターハイには出場できませんでした。

卒業後、東北大学工学部に入学し、高校バスケット部の 2 年先輩が在籍していたこともあって、今度は迷わずにバスケット部に入部。たばこ酒を覚え、一人暮らしでタガが外れた生活の中、バスケットだけはまじめに参加しておりました。インカレには程遠いものの、北海道大学との定期戦や 7 帝戦はとても楽しく、現役引退後は、2 年間、女子部コーチを務めました。

卒業後、石油化学プラント建設する東洋エンジニアリングに入社し、ここでもバスケット部に入り、千葉県実業団、関東実業団などで年相応にプレーしていました。が、54 才、練習中にアキレス腱断裂してしまい、当時、建設現場勤務（単身赴任）が増えたこともあって、それ以来、バスケットからは遠ざかっていました。

コロナ禍が明け、建設現場勤務をやめたのを機にバスケットを再開し、2023 年に大学 0B シニアチーム（セブンブラザーズ）に入れていただきました。

昨年からは週 4 日勤務にして自由時間が増えたこともあり、バスケットの優先順位を上げ（孫の次ですが）、70 才を超えるまではバスケットをしたいと思う、今日この頃です。ただし、今度アキレス腱切ったらバスケット禁止と妻（元バスケット部）からは厳命受けております。

振興会殿のおかげで、あこがれの代々木第二体育館でバスケットができ、感激しております。これからよろしく願いいたします。

以上

令和7年度 秋季講演会講演録

観客はどのようにバスケットボールを変えてきたのか？

— バスケットボール黎明期のアメリカを中心に —

谷釜 尋徳



本講演は、黎明期のアメリカのバスケットボールがいかに観客の影響を受けて変わっていったのかについて、ルールの変遷と絡めて解説したものである。

1. 健康増進策としてのバスケットボール（競技）の誕生と普及

産業社会への移行によって単調な工場労働や管理化が進んだ19世紀のアメリカでは、人びとの心身両面の健康問題が浮上する。また、当時のアメリカ社会は、増え続ける移民への対応に悩まされていた。こうした社会的な課題に目を付けたアメリカの宗教界（福音派）は、人びとに産業社会を生き抜くための健康増進の手段を提供することで、自らの存在意義を示す路線を辿る。その文脈から、アメリカで健康増進の拠点として根を張ったのがYMCA（キリスト教青年会）であった。YMCAは、そのネットワークを利用して身体教育の分野に積極的に参入し、産業社会の弊害から人びとを守ろうとしたのである。

1891年に国際YMCA訓練学校の体育教材として生まれたバスケットボールは、すぐさまYMCAを飛び出して大学や高校にも伝わり、さらには労働者の間に広まっていく。とくに、バスケットボールは都市の移民下層社会に急速に普及する。当時、新参者としての移民層をアメリカ社会に馴染ませる手段としてスポーツに期待が寄せられたが、その最たるツールがバスケットボールであった。バスケットボールは、近代アメリカ社会に内在した課題を解決する役割を積極的に担ったといえよう。

2. 観客の登場によって生まれた境界線

ネイスミスは、競技の誕生当初より、バスケットボールが観客を魅了するスペクテイタースポーツになることを予見していた。実際、最初のゲームが行われてから数日後には、ネイスミスの授業で実施するバスケットボールを目当てに、体育館のバルコニーに見物人が集まるようになった。

観客の登場は、今日では見慣れた用具の出現を後押しした。当初、ゴールとして使われた桃の籠はバルコニーのすぐ下に取り付けられたため、熱狂的な観客のなかには、ひいきのチームがシュートしたボールに触れてゴールに入れたり、反対に邪魔する者が登場する。これではゲームが成り立たないので、観客が介入できないようにバルコニーに木製のバックボー

ドを設置し、そこにゴールを取り付けて対処した。すると、今度はバルコニーの観客たちが、木製のボードがあるせいで、せっかく最前列に陣取ったのにゲームが見えないと主張しはじめた。そこで、観客側からゲームが見えるように金網のバックボードが採用されたが、金網に細工をしてシュート成功率を高めようとする不正行為が頻発したため、今日ではお馴染みの透明のバックボードが登場したのである。

黎明期のバスケットボールでは、試合中にボールがコート外に出ると、双方のプレーヤー同士で激しいボール争奪戦が繰り広げられた。やがて、コートサイドの観客側から危険を訴える声が高まると、天井から吊るした金網（ケージ）でコートを囲み、場外乱闘から観客を守る境界が設けられる。

3. 黎明期のルール変更と観客の影響

バスケットボールの最初のルールは、ネイスミス考案の「13条のルール」である。その後、「13条のルール」はYMCAのネットワークを通じて全米に広まっていく。

初の公式ルールブックは1892年発行の“Basket Ball: Rules for Basket Ball”である。その後、しばらくの間、ルールの改訂作業はバスケットボールの生みの親であるYMCAに委ねられた。しかし、加速するバスケットボール人気はやがて営利目的のプロ興行を生み出す。これに強い懸念を抱いたYMCAは、組織本来の宗教的な目的の妨げになると判断し、ルールの運営業務をAAU(Amateur Athletic Union)に受け渡すことになった。

1930年代には今日に連なるルール変更が相次ぐ。競技レベルが上がり強固なディフェンス戦術が生まれると、攻撃側は簡単にゴール付近に攻め込めなくなった。すると、いったんリードしたチームは、ひたすらバックコートでパスを回して時間を浪費する（ストーリング）作戦に出る。その結果、バスケットボールの魅力である素早い展開が失われ、観客数が減少する。そこで、観客離れを防ぐために、1932年にはボールを保持したチームは10秒以内にフロントコートにボールを進めなければならないという新ルールが生まれる。

また、当初のバスケットボールは、ゴール成功後にはプレーが止まり、センタージャンプでゲームが再開されていた。しかし、このルールは長身のジャンパーがいるチームが有利になるという批判を呼び、1937年に廃止される。このルール変更によって、シュートが決まってもプレーが中断されないアップテンポな競技特性が備わり、観客をさらに熱狂の渦に巻き込んでいった。

4. 得点のカウント方法の変遷

初期のバスケットボールでは、ファウルに対する罰則の重さをコントロールし、1回のフィールドゴール（FG）による得点の価値を調整することが繰り返し行われている。

1891年にバスケットボールが誕生した当初は、1回のFGによる得点は1点で、「13条のルール」では、片方のチームが連続3回ファウルを犯すと自動的に相手チームに1点が加算された。しかし、当時はシュート成功率が極めて低かったため、連続3回のファウルがもたらす1点がゲームの勝敗を大きく左右し、FGの成功よりもファウルによって試合が決まることが常態化する。こうした事態を避けるために、以下の順序でルール変更がなされた。

<1893年> フィールドゴール (FG) とファウルの罰則点を調整

FG: 1回成功で3点

ファウルの罰則: ファウルが起こるたびに1点 (自動加算)

<1894年> フリースロー (FT) の誕生

FG: 1回成功で3点

ファウルの罰則: ファウルが起こるたびに FT が1投→成功で3点

<1896年> FG フィールドゴールと FT の点数を調整

FG: 1回成功→2点

ファウルの罰則: ファウルが起こるたび FT が1投→成功で1点

5. おわりに

初期のルール変更の経緯をみると、バスケットボールが観客の主張を取り込みながら発展していった跡がうかがえる。当時のアメリカでは“ニュースポーツ”であったバスケットボールは、常に観客を意識して、競技の面白味と平等性を天秤にかけた試行錯誤を行う必要があったのである。したがって、観客の意見を吸い上げながら改良を重ねたバスケットボールが、観る者を惹きつける魅力を持っているのは至極当然のことだと結んでおきたい。



<講師紹介>

谷釜尋徳 (たにかまひろのり) 氏

<略歴>

1980年、東京生まれ。
2003年、日本体育大学体育学部卒業。
2008年、日本体育大学大学院博士後期課程終了。
現在、東洋大学法学部教授。博士 (体育科学)

<主な著書>

『歩く江戸の旅人たち』『江戸の女子旅』(以上、晃洋書房)
『スポーツの日本史』(吉川弘文館)
『バスケットボール秘史』(光文社新書)

第16回シニアバスケットボール交歓大会 2025 in YOYOGI を終えて

[普及部]

10月29日(水)、30日(木)の2日間、代々木第二体育館で、男子60歳以上の12チーム、女子50歳以上の3チーム合計15チームが参加し、「シニアバスケットボール交歓大会」を開催しました。今大会は、コロナ禍の開催中断を経て多くのチームに参加いただき、新たな大会がスタートした感がありました。

本大会は勝ち負けよりも代々木第二体育館でのプレーを楽しんでいただくため、全チームが2日間で2試合(原則1日1試合)を戦うよう試合が組まれています。が、いざコートの上に立つとお互いに闘争心に火が付き、最終クォーターまで接戦という白熱した試合がいくつも見られました。

参加チーム

(男子 12チーム)

FREEDOM G	福岡ピンクパンサー	横浜ビー・シーガールズ
STARS OF STARS	COKI-COKI	シルバーキッズ
駄馬	岡山・広島連合	岩手マスターズ
レイダース	セブンブラザーズ	Tigre Azzurro

(女子 3チーム)

長野クラブシニア	代々木ガールズ	MYC
----------	---------	-----

※ 本号表紙裏面に各チームのメンバーの写真が掲載されていますので、是非ご覧ください。



NPO 法人日本バスケットボール振興会は、「振興会の会員の交流」を目的に交歓大会を始めた経緯があります。なんといってもシニアバスケット愛好者にとって、代々木第二体育館の存在は特別のものがああり、一度は代々木のコートで試合を体験したいとの思いを込めて大会名を「シニア交歓大会 in YOYOGI」としてスタートしました。実業団連盟が「日本リーグ」を主催していた時代には、振興会の主催で、現役を5年以上経た日本リーグのOB・OGによる大会を代々木第二体育館で開催したことがあります。

シニアバスケットボール交歓大会に参加した選手の中から、第6回の「在間弘」(アリマヒロム)さん、第8回の「日笠敦」(ヒガサアツシ)さん、第16回の「油井康」(ユイコウ)さんの3名が、「日本スポーツグランプリ」を受賞しています。「日本スポーツグランプリ」は、「公益財団法人日本スポーツ協会」(JSPO)が主催する荣誉のある功労者表彰制度です。長年にわたりスポーツを実践するとともに広く国民に感動や勇気を与え、顕著な功績をあげられた中高年層の個人又はグループに授与されるもので、代々木のシニア交歓大会に参加した実績も受賞にいたる評価につながっています。

シニア交歓大会に参加する皆さんを表現するために「大会の旗」を作成しました。

旗には、選手たちを「福籠」「不苦勞」「長老」「賢者」などの象徴として「フクロウ」をイメージしました。

また、ポスターでは、選手たちをシューティングスター（流れ星 Shooting Star）としてイメージしています。



2026（令和8）年の代々木大会の日程は既に決まっています。

2026年10月28日（水）29日（木）代々木第二体育館 でお会いしましょう。

以上

最近の我が国バスケットボール界の動向

[普及部]

2025. 7～2025. 11の間に報道された記事を時系列に掲載

(記述内の「世界ランク」は、FIBA世界ランキングで、
2025年、女子8月8日付け、男子12月4日付けによる)

2025年

- ・ 7/3、東京・有明アリーナで女子国際強化試合があり、日本女子（世界ランク 11 位）は 65 - 65 でデンマーク代表（同 59 位）と引き分けた。
- ・ 7/4、東京・有明アリーナで女子国際強化試合があり、日本女子は 89 - 55 でデンマーク代表に快勝した。
- ・ 7/5、東京・有明アリーナで男子国際強化試合があり、日本男子（世界ランク 22 位）はオランダ代表（同 53 位）に 70 - 78 で逆転負けした。日本の弱点とされるゴール下で欧州勢と互角以上に渡り合えたのは、敗戦の中にあった収穫であった。
- ・ 7/6、東京・有明アリーナで男子国際強化試合があり、日本男子はオランダ代表を 74 - 53 で下した。日本は、効率よく加点し前半を 43 - 23 で折り返し、後半もそのリードをたもった。
- ・ 7/13、アジアカップが中国の深圳で行われ、日本女子（世界ランク 11 位）は、2大会ぶりの優勝を狙う。初日、レバノン（同 41 位）と対戦し 72 - 68 で辛勝した。
- ・ 7/14、2日目、1次リーグB組で日本女子はフィリピン（同 39 位）に 85 - 82 で競り勝ち、開幕2連勝として同組2位以上を確定させた。
- ・ 7/15、1次リーグB組で日本女子はオーストラリア（世界ランク 2 位）に 67 - 79 で敗れた。日本は前半9点リードしたが、第3クォーター終了時 59 - 59 の同点であったが、第4クォーターに突き放された。
- ・ 7/18、アジアカップ準決勝進出決定戦で1次リーグB組2位の日本女子はA組3位のニュージーランド（世界ランク 21 位）を 77 - 62 で下した。
- ・ 7/19、アジアカップ準決勝、日本女子は強豪中国（世界ランク 4 位）と対戦 90 - 81 で破り、7大会連続で決勝戦に進んだ。日本は前半 49 - 51 とリードされたが、後半3点シュートでリードし、終盤追い上げられたが逃げ切った。
- ・ 7/20、女子最終日、決勝戦、日本女子はオーストラリアに 79 - 88 で敗れ、2大会連続の準優勝だった。来年9月にドイツで行われるワールドカップの出場権の獲得は3月のW杯予選に持ち越された。前半 43 - 54 とリードされたが、第4クォーターで一時追いつくも、オーストラリアに振り切られた。
- ・ 7/19、千葉・ららアリーナ東京ベイで男子国際強化試合が行われ、日本男子（世界ランク 22 位）はデンマーク（同 59 位）を 69 - 64 で破った。直近の韓国との強化試合で2連敗を喫していた。ホーバス・ヘッドコーチは「勝ってよかった、とりあえず」「80点入っていないから良い攻撃のペースを作りたい」などと語った。

- ・ 7/20、男子国際強化試合、日本男子は、デンマークを69-63で下し2連勝した。ホーキンソンが両チーム最多17点を挙げ、試合を優位に進めた。日本は、強化試合6試合を終え、8月5日にサウジアラビアで開幕するアジアカップに臨む。
- ・ 8/6、男子のアジアカップは、サウジアラビアのジッタで行われ1次リーグB組初戦で日本男子はシリア（世界ランク72位）を99-68で下した。
- ・ 8/8、アジアカップ1次リーグB組第2戦、日本男子は、イラン（世界ランク26位）に70-78と敗れ、1勝1敗となる。
- ・ 8/10、アジアカップ1次リーグB組最終戦、日本男子はグアム（世界ランク79位）に102-63と大勝して通算2勝1敗となり、1次リーグ突破が決まった。
- ・ 8/12、アジアカップ準々決勝進出決定戦が行われ、日本男子はレバノン（世界ランク28位・前回準優勝）と対戦し73-97で敗れた。日本は、守備が安定せず、前半41-53、後半も立て直すことができず、その差を広げられて終了。
- ・ 9/19、バスケットボール男子の各大陸代表などで争うインターコンチネンタルカップはシンガポールで1次リーグが行われ、チャンピオンリーグアジアを制して出場したB1リーグ1位の宇都宮は欧州代表ウニカバ（スペイン）に68-97で敗れた。
- ・ 9/21、アジア代表宇都宮は、インターコンチネンタルカップ5位決定戦でイラワラ（オーストラリア）に69-93で敗れ6位に終わる。
- ・ 9/27、日本バスケットボール協会は、定時評議員会と臨時評議員会を開き、新会長にBリーグの島田慎二チェアマンを選任した。「強い組織をめざす。積極的に投資をしながら、稼ぐ機能を強化していく」と抱負を語る。新理事には、宇都宮の田臥勇太選手やWリーグ・トヨタ自動車の大神雅子ヘッドコーチが選ばれた。日本代表強化の責任者としてB1長崎の伊藤拓摩・社長兼ゼネラルマネージャーが就任。
- ・ 10/3、2025~2026年シーズンりそなグループBリーグ開幕戦がトヨタアリーナ東京であり、宇都宮が81-56でA東京を破る。
- ・ 10/4、りそなグループBリーグ1部は、各地で試合があり、横浜BCが琉球を破った。SR渋谷は、クラブ創設90周年のシーズン、秋田を破り白星スタート。
- ・ 10/18、バスケットボール女子のWリーグは各地で開幕。3連覇を目指す富士通は、デンソーを80-69で破った。
- ・ 10/21、バスケットボール男子Bリーグは来年秋から始まる新カテゴリーで2部にあたる「Bリーグ・ワン」計25クラブ、3部相当の「Bリーグ・ネクスト」3クラブの参入を発表した。
- ・ 11/28、男子ワールドカップアジア1次予選の初戦がジーライオンアリーナ神戸であり、日本（世界ランク22位）は台湾（世界ランク68位）を圧倒し90-64で快勝した。B組には台湾、中国（世界ランク27位）、韓国（世界ランク56位）が所属、来年7月までホームアンドアウェイ方式で、上位2チームが2次予選にすすむ長い戦いの道のりが始まった。
- ・ 12/1、台湾・新北市の新莊体育館で行われた台湾との第2戦、日本は、出足が悪く、第1Qは17-22のビハインドで苦戦したが、第2Qに挽回して前半は42-36の6点差で折り返す。第3Q終了時点で同点に追いつかれたが、第4Qでのベテラン陣の活躍により最後は80-73の7点差で台湾を振り切った。

以上

全国各地のシニアバスケットボール大会

[普及部]

◆第31回北海道ゴールデンシニアバスケットボール交歓大会

札幌大会（主催：高齢者バスケットボールクラブ）

昨年に続いて9月27（土）札幌（厚別区体育館）において、北海道4地区から集まり、恒例のゴールデンシニア交歓大会が開催された。男子は、「札幌 ロートルズ」(※)「函館 HBO クラブ」「帯広 シルバーズ」「旭川 ななかまど」の北海道のチームに加えて「埼玉ブルーウインズ」の5チームと、女子は「札幌」「函館」「旭川」の3チームが参加した。選手の年齢制限は、正会員（男子60歳以上・女子50歳以上）、準会員（男子55歳以上・女子45歳以上）、寿会員（男子71歳以上）、寿Jr会員（男子70歳以上・女子60歳以上）に分かれており、原則として、それぞれ第1・第3クォーターは正会員のみ、第2・第4クォーターは準会員2名以内が出場できる。しかし、チームによって参加する選手の年齢が異なり、例外事項を設けており、さすがに30回以上を数える大会の歴史を感じる。

大会後は、参加全チームの選手が集まり、いつもの懇親会。今回は、Bリーグチームのレバンガ北海道の折茂さんご兄弟が飛び入り参加し、あいさつの中でこれから始まるシーズンの意気込みが語られた。

来年の「第32回北海道ゴールデンシニアバスケットボール交歓大会」は、帯広市で9月26日（土）に開催予定である。

(※) <チーム紹介> ロー アンド トルズ（通称：ロートルズ）

（『ロー アンド トルズ 創立40周年記念誌』発行：2025.7.15より抜粋）

1984（昭59）年7月15日、千葉幹太郎、福原健次、細川満男、北村健一の4氏の発起で創立された。正式チーム名は「RO & TORUS（ロー アンド トルズ）」と表記し、通称ロートルズとしている。語源は中国語で老人を意味する〈老頭人（ロートル）〉をもじり、「老を除（と）る集団」、即ち、いつまでも若々しくありたいとの気持ちから命名された。

会員は、原則として男性は60歳、女性は50歳以上の愛好者で構成されており、発足以来、毎日曜日を定例活動日として、常時40名ほどが2時間余り仲良く楽しく爽やかな汗を流している。ロートルズは高齢者バスケットボールの先駆者的存在として、ここに40年の足跡を築いた。その間、160名もの会員が入会している。

◆第3回エール杯（岡山大会）

9月27日、28日の2日間にわたり、ジップアリーナ岡山（※）で第3回エール杯全国スーパーゴールデン・プラチナシニアバスケットボール岡山大会が開催された。

（※ ジップアリーナ岡山は本年10月1日からシゲトーアリーナ岡山に改名された。）

今大会には、全国からスーパーゴールデンシニア（男性65歳以上、女性55歳以上）に19チーム、プラチナシニア（男性70歳以上、女性60歳以上）に11チームが参加した。勝ち進めば1日2試合、2日間で4試合を戦わなければならないハードなスケジュールのなか、スーパーゴールデンシニアではディノニクス（大阪）が、プラチナシニアではブラックパンサー（山梨）が見事優勝した。

また、1日目の夜に岡山プラザホテルで開催された懇親会には総勢300名近くが参加し、昼間の疲れも忘れて大いに盛り上がった。

参加チームは以下の通りである。

スーパーゴールデンシニア（19チーム）

横浜ビー・シーガールズ（横浜）、沖縄オールドスターズ（沖縄）、Coki-Coki（千葉）、セブンブラザーズ（東京）、スーパーゴールドセリアックス（岡山）、KYUSHU FIVE（福岡）、鳥取コスモス（鳥取）、TOKYO BEARS（東京）、新潟スピリッツ（新潟）、Tigre Azzurro（東京）、FREEDOM SG（愛知）、広島47THスーパーゴールデン（広島）、高田GT60（奈良）、長崎チャンポンズ（長崎）、ディノニクス（大阪）、YOYO（東京）、シニアギャロップス（大阪）、四国ゴールデンシニア（愛媛）、富士山静岡（静岡）

☆優勝：ディノニクス（大阪） 準優勝：TOKYO BEARS（東京）

プラチナシニア（11チーム）

ブラックパンサー（山梨）、富士山静岡フリーダム（静岡・名古屋）、Tigre Azzurro（東京）、Coki-Coki（千葉）、広島47THプラチナゴールデン（広島）、沖縄がんじゅうスター（沖縄）、KYUSHU FIVE（福岡）、せんべらずゴールデン（埼玉）、セリアックス酒飲み仲間（岡山）、沖縄オールドスターズ（沖縄）、シニアギャロップス（大阪）

☆優勝：ブラックパンサー（山梨） 準優勝：シニアギャロップス（大阪）

以上

WORLD MAXI Basketball Championship 2025

参戦報告

— シニア世代が切り拓く国際舞台 —

上田 健二

このたび、私は日本チームの一員として WORLD MAXI Basketball Championship 2025に参加いたしました。

本大会には世界各国から400以上のチームが集い、日本からは70歳以上のカテゴリーに私を含む11名が出場しました。10日間で5試合を戦い、対戦相手はイギリス、ウルグアイ、アメリカ、コスタリカ、ポーランドでした。その中でコスタリカとポーランドに勝利し、カテゴリー70+として初めて2勝を挙げる快挙となりました。

FIMBA (Federation of International Maxi basketball Association) のポリシーの一つに、「バスケットボールを通じて健康の増進、国際交流、生涯スポーツの普及」を目的に活動している国際組織であり、日本からも毎年シニアチームがこの大会に参加しています。

大会初日には市中パレードが行われ、地元住民や観光客に盛大に歓迎されるとともに、国や年齢を超えた交流が実現し、私達日本からの参戦メンバーも大変意義深い時間を過ごすことができました。



ここで同行したメンバーの一人である、飯野忠英さん（ブラックパンサー）の本大会でのコメントを紹介します。

『私のバスケットライフは日本で開催されるゴールデンシニアの大会と FIMBA バスケットボールです。71歳になる私はこれらの大会に参加することで喜びや幸せを感じ、仲間との友情を深めています。近年のサプライズは2024 イタリア大会で試合会場に行くバスで USA の選手 Kinney と知り合った事です。憧れの USA の選手です。翻訳アプリを使い会場に着くまでの20分程度、たあいもない会話の中で「日本は弱いので相手にならないね」と話すと、彼は「強い弱いではなく、コートに立つこと・アジアから来た日本がここにいる事が大切なんだ」と話してくれました。彼は大学で哲学を教えていた教師でもあり、この言葉に胸を打たれました。私は過去に手術が必要な大怪我をして体力も落ちあきらめかけた事もありましたが、コートに立ちたい一心でリハビリに励んでできました。「コートに立つ事が大切なんだ」

との Kinney の言葉が身に沁みます。私達高齢者は来年コートに立てる保証はありません。今を大切に、今を楽しまなくてはいけない。健康の大切さを日々思っています。Kinney とはスイス大会でも会うことが出来、アドレスを交換して交流を深めています。スポーツ（バスケット）は国境を越えるんだと実感しました。』

この飯野さんのコメントは、まさに FIMBA のポリシーそのものだと思います。

私自身、高校卒業後は長らくバスケットから離れていましたが、73 歳で郷里の松山に帰郷したことをきっかけにシニアチームの存在を知り、再びボールを手に入れました。

国内大会への参加を経て国際大会の存在を知り、昨年のイタリア大会、そして今年のスイス大会と続けて出場することができました。

今回の経験を通じて強く感じたことは、年齢やその他自分のおかれた環境を理由に自ら限界や壁を設けるのではなく、挑戦する気持ちを持ち続けることの大切さです。

年齢を重ねても、スポーツを通じて健康を維持し、国際交流を深め、生涯にわたり挑戦できる場があることを、多くの方に知っていただきたいと思います。



試合後、コスタリカチームと一緒に

来年のギリシャ、アテネで開催される予定の国際大会には、日本チームで今まで参加経験の無い 75+ のチームを結成して参戦したいと思っています。

また、FIMBA からは「日本の女子シニアチームはいつ来るのか？」の言葉も頂いております。是非実現したいものです。

本大会を通じて得られた喜びと学びを胸に、これからも一人のシニアプレーヤーとして挑戦を続けてまいります。

(上田健二 四国ゴールデンシニア)

最近の競技規則について

小澤 正博

2021 東京オリンピック以降、細部を含め毎年競技規則が改訂されている。細部はともかくとしてゲームにおけるプレイに大きく影響がある主な部分について記述してみたい。

○ ショットについて(競技規則第 15 条)

ショットの始まりはリングに向かって手足を差し出した時。終わりは、ジャンプシュートの場合着地した時、着地ショットの場合はボールが手を離れた時。ドリブル等で動きながらの場合もボールが手を離れた時に終わる。

○ トラベリングについて(第 25 条)

動きながらボールをコントロールした場合、フロアについている足を 0 歩とする。したがってその後は 2 歩までステップが可能。

動きながら空中でボールをコントロールした場合、次にフロアについた足を 0 歩とする。したがってその後は 2 歩までステップが可能。

例として、ミートしながらパスを受けること。ランニングシュート時の 3 ステップなどが挙げられる。

○ ショットクロックについて (第 29 条)

フロントコートにボールが進められた時、バイオレーションもしくはファウル、もしくはジャンプボールシチュエーションなどで審判の笛が鳴った場合、13 秒以下だったら 14 秒に戻してゲームが再開される。

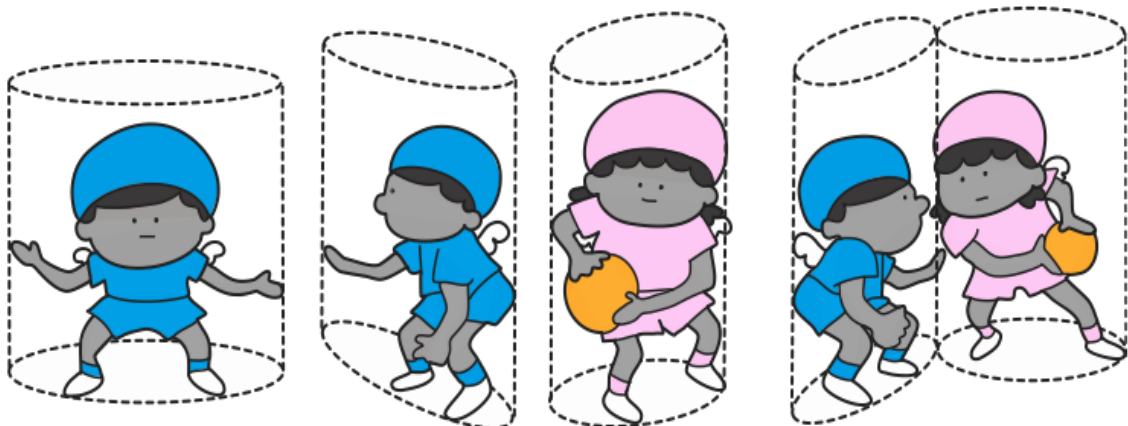
14 秒以上だったらそのままゲーム再開。

○ パーソナルファウルについて (第 32 条)

オフense、ディフェンスにかかわらずプレイヤーはコート内の位置を占める権利がある。その位置は身体のシリンダーの範囲となる。オフense、ディフェンスプレイヤーが近接した場合シリンダーは重なることもある。

シリンダーの概念は以下の通り。

- ★ 正面 両足、曲げられた膝、腰より上でボールを持っている腕の位置まで。
- ★ 背面 お尻の位置まで。
- ★ 側面 肘と脚の外側の位置まで。



オフェンス、ディフェンスを問わず相手シリンダー内を侵して接触を起こせばファウルの可能性が高いがその原則は 2021 年 9 月に発行された JBA プレイコーリング・ガイドラインによる以下の通り。

★ パーソナルファウルの成立

- 1) 身体接触があったこと
 - 2) その接触がプレイに影響をもたらされたこと
 - 3) その接触によってプレイが阻害されたこと
- 以上の条件がそろった場合ファウルとなる。

★ 審判は上記原則を見極めるため、単に接触があっただけでは笛を吹かないので、ファウルの判定に時間がかかることもある。

ここでパーソナルファウルの成立について、以下に例を挙げてみる。

1. 味方にパスを送ろうとしているプレイヤーにディフェンスが接触した場合、そのパスが正当に通って味方が次のプレイに入った場合、接触があってもプレイが阻害されず、そのパスが成功すればファウルにはならない。
2. ドリブルしながら動いているプレイヤーにディフェンスが接触しても、それだけではファウルは成立しない。更にオフェンスが動いて方向を変えようとした場合、それを阻害するディフェンス側の接触があればディフェンスファウルとなる。
3. インサイドでオフェンスとディフェンスが押し合いをしても、それだけではファウルにはならない。インサイドプレイではお互いのシリンダーが重なり合うことが多いので、審判は手や腕などのオーバーシリンダーを見極めて笛を吹くので笛が鳴るタイミングが遅れることもある。
4. リバウンドの時お互いがボールに向かって跳んだ場合、よく身体接触が発生することがある。この場合どちらかが完全にボールを保持できればファウルは成立しない。
5. オフェンスがゴールに向かってスライドインする場合、ディフェンスにも守る権利があり、そこでの接触があっても直ちにファウルにはならない。このような場合の判定はオーバーシリンダーかどうかでファウルの見極めがなされる。
6. オフェンスとディフェンスが激しくぶつかり合い両方のプレイヤーが転倒した場合、どちらに責任があるかはっきりしないケースではディフェンスファウルとなる。

○ スクリーンについて(第 33 条)

スクリーナーは止まっていなければならない。動きながらのスクリーンで身体接触があった場合は直ちにファウルとなる。

○ テクニカルファウル(第 37 条)

プレイヤーは審判、コミッショナー、テーブルオフィシャル、観客に対して敬意をもって対応しなければならない。判定に対する抗議などはテクニカルファウルが吹かれることが多くなっている所以注意を要する。

以上

群馬県バスケットボールのあけぼの

— 群馬県のバスケットボール普及の流れ —

[歴史部]

群馬県バスケットボール協会（一般社団法人群馬県バスケットボール協会）の設立年月日は、1948（昭23）年3月とされている。今回は、群馬県にバスケットボール競技が普及した大正時代から昭和初期までの活動を報告する。

● 「日本体育協会 75 年史」 （財団法人日本体育協会・昭和 61 年 6 月 25 日発行）

「群馬県体育協会」参考

群馬県体育協会は、1928（昭3）年12月12日に県庁において創立集会を開き143名の出席者を得て群馬県体育協会の創立をみた。1935（昭10）年、県体育協会は種目別競技団体育成のために部制をしくがバスケットボールについての競技記述はない。その後1942（昭17）年大日本体育会が結成され、群馬県体育協会も改組して、大日本体育会群馬県支部、群馬県学徒体育振興会となる。

1946（昭21）年5月1日、群馬会館会議室において県体育協会設立委員会を開催し、中学校、国民学校、民間スポーツ団体の代表30名が出席。11日に記念大会が開催された。体育協会が再建された当時の競技団体は、陸上、水泳、軟式野球、バレーボールなど10競技団体。1947（昭22）年に山岳連盟、社会人連盟が結成され、翌1948（昭23）年にバスケットボールなど7競技団体が結成された。

● 「バスケットボールの歩み—日本バスケットボール 50 年史」

（財団法人日本バスケットボール協会・昭和 56 年 3 月 30 日発行）参考

群馬県体育協会が戦後の混乱の中で昭和 21 年に設立され、年次計画をたてて行事を行うようになった。バスケットボールは、県教育委員会や県体育協会の援助を得て、愛好者の手によって大会が運営されていたが、昭和 23 年になって協会を設立しないと国民体育大会の参加に欠けるということになり、井上卯一郎、青木万平、正木徳次郎らを中心とする準備会を経て群馬県バスケットボール協会が設立された。

● 「籠球 NO. 2」 1931（昭6）年 10 月発行

第6回明治神宮体育大会籠球部地方予選依頼先は、群馬県体育協会県庁教育課内と、群馬県では、県体育協会が窓口となっている。1930（昭5）年に発足した大日本バスケットボール協会（以下、日本協会）は全国を9支部に分けて組織化するように指導している。

● 群馬県バスケットボール 50 年の歩み （30 周年記念）

群馬県バスケットボール 60 年の歩み （40 周年記念）

草創期（戦前期）

群馬県バスケットボールの先覚者 「石北雅雄と小此本文也」

1923（大12）年、高等師範学校で小学校体育指導者講習会が開催され、石北雅雄（当時群馬県佐野小学校）と小此本文弥（当時勢多郡桂萱小学校）の二人が参加した。講習会の内容としてバスケットボールがあり、その解説と実技指導が行われ、二人は始めてバスケットボールを研修した（注：この時期に、各県の師範学校で三橋体育研究所による体育講習会が開催され、バスケットボール競技の指導も行われている）。

石北は、群馬郡第一区学事内の教員に、小此木は勢多郡第二学事会内の教員にそれぞれ伝達し群馬県小学校においてバスケットボールが始めて指導された。後年、群馬郡、勢多郡の教員チームが県下のバスケットボールの双壁になったことも、このことによってうなずけることである。石北は、1925（大14）年、館林女学校に転任しバスケットボールの指導と普及に尽力し、1929（昭4）年明治神宮体育大会のバスケットボール競技に群馬県代表として同校チームを参加させた。1930（昭5）年、群馬県庁学務課勤務となり体育指導につくすとともに、バスケットボールの普及・発展に尽力した。また、小此木は県下教員のバスケットボール大会において常勝の勢多教員チームをつくりあげ、県のバスケットボールの基礎を築いた。

最後に

群馬県バスケットボール協会の発足は、戦後の1948年を待つことになる。1931（昭6）年に日本協会から支部の発足を要請されたと考えられるが、関東地区の各県支部での設立にいたらず、群馬県も県体育協会の県庁教育課窓口であった。昭和17年以降に組織が変更され、戦後のバスケットボール協会創立に至ったと考えられる。

群馬県師範学校に1924（大13）年に唯一の雨天体操場が作られ、1928（昭3）年に籠球部が誕生した。小学校、中学、教員などの大会のほか、女子については群馬県女子師範学校、前橋高等女学校、高崎高等女学校、安中高等女学校、館林高等女学校などで対抗形式の競技が行われ、「学校体育」としてバスケットボールが普及していった。

戦前の群馬県のバスケットボールは、「学校体育」として群馬県庁教育課内の県体育協会が担当し、各種の大会が熱心な関係者によって開催されていたのである。

（編集 渡辺 誠）

【先人の軌跡】

「リーグ戦をやりたい」100年前の思い

— 100年の歴史を超える関東大学バスケットボール連盟 —

[歴史部]

〈主な連盟名称の変遷〉

1923 (大 12) 年 5月	立教大学・早稲田大学・東京商科大学 (現一橋大学) の三校で「学生籠球連合」が誕生
1924 (大 13) 年 6月	「日本学生籠球連合 (聯合)」と改称
1933 (昭 8) 年 10月	「関東大学籠球連合 (聯合)」に改称
1942 (昭 17) 年 6月	「第 19 回関東大学リーグ戦」で休止
1946 (昭 21) 年 5月	「第 20 回関東大学リーグ戦」再開、戦後の復活
1950 (昭 25) 年 11月	「関東大学新連盟」を結成
1966 (昭 41) 年 4月	新たに「関東大学バスケットボール連盟」を結成
1982 (昭 57) 年	「関東大学連盟」「関東男子学生バスケットボール連盟」を編成
1999 (平 11) 年	「関東大学バスケットボール連盟」に改称、分裂や合併のたびに変わっていた大会の回数を「通算回数」に変更 (『60年のあゆみ』全日本大学バスケットボール連盟より)

・「バスケットボールはYMCAのもの」という考え方

1917年、日本で初めての国際大会、第3回極東選手権大会が東京芝浦で開催され、日本代表は京都YMCAチーム、1923年に大阪で開催された第6回極東選手権大会の代表チームも東京YMCAチーム、の選手が占めていた。東京YMCAの主将で、大日本体育協会の理事でもあった「薬師寺尊正」は、バスケットボール専用の体育館の建設・機関誌の発行などに加えてYMCA主導でバスケットボールの全国的組織の設立も考えていた。しかし、1923(大12)年の大震災により東京YMCA体育館が焼失したこともあり、徐々にバスケット界へのYMCAの影響力が薄れることになった。

・大日本体育協会主催による全日本選手権大会の開催—運営は学生が担う—

1921年、大日本体育協会主催で「第1回全日本籠球選手権大会」が駒場で行なわれたが、当初の参加チームは全てYMCAチームであった。1923年に御茶の水の東京女子師範学校の校庭で内務省主催の「衛生博覧会」が開催された際の「第2回全日本籠球選手権大会」に立教大、早稲田高等学院、東京商大予科の三チームが出場したのが、公式競技会に学生チームとして登場した初舞台であった。

・学生チームの台頭

1923(大12)年の大震災で東京YMCA体育館が焼失したことにより、バスケット

ボールの活動の場が徐々に各大学へ移り、各大学にバスケットボール部が結成される中、大学同士の「リーグ戦」をやりたいという機運が高まった。「全日本選手権大会」が開催されたが、運営の実態は学生によるものであった。各大学にバスケットボール部が結成されたことを考えると自然な流れで、(当然)また、このことが10年を経て「大日本バスケットボール協会」の設立にいたる流れとなる。

◆ 関東学生リーグ第30回記念特集『バスケットボール23号』1955年12月

初代委員長の浅野延秋(早稲田大学/大正15年卒)が「学生聯合の誕生」について寄稿している。

・「学生聯盟」の誕生

「学生聯盟」が結成されたのは1923(大正12)年、当時、YMCA関係のチームが大いに活躍していて、学生としては、立教大学、早稲田大学、東京商大(現一橋大学)の三つのチームがありました。1921(大10)年の秋に大日本体育協会による全日本籠球選手権大会が駒場のグラウンドで行われましたが、学生チームは参加していません。1922(大11)年春、お茶の水の東京女子高等師範学校校庭で内務省主催の「衛生博覧会」が開催された際のジュニア、シニアに分けて行われた籠球選手権大会に、立大、早稲田高等学院、東京商大予科の三チームが出場しました。これが、公式競技会に学生チームとして初めての参加でした。

・「リーグ戦をやりたい」という機運

この頃から「リーグ戦をやりたい」との声が出てきましたので、私が肝いりとなり先ず準備委員会を作りました。そのメンバーは、立教から松崎一雄氏、横山一郎氏、東京商大から阿部俊介氏と桜井氏、早大から故芋川四磨氏と私。この6名で準備対策をねり、秋には規約の草案も承認されました。

・「全日本学生聯合」改称に込めた思い

連盟の名称は「全日本学生籠球聯合」としました。これは、今は小さいが将来には全日本の学生チームを全部まとめたものしたい、との大きな希望と抱負のもとにつけた名称です。事業としては、加盟各大学のリーグ戦を行うこと、そして技術の錬磨と各校間の親睦をはかるは勿論、この道の中心となり全国に籠球を発展させることを大きな目的にしたものです。即ち当時、協会というような統一機関がなかったため、自分達でその統一指導機関たらんと大きな抱負をもってスタートをしました。

・組織の運営について 初代委員長 浅野 延秋

委員長は1名、副委員長は2名、委員若干名と決まり、選挙により初代委員長に浅野、副委員長に、松崎、阿部がそれぞれ選出されました。前記のように連盟一聯合が出来、取りあえず三校間でリーグ戦を始め、春、秋の2回行うことにしました。大正12年秋のことです。第1回のリーグ戦は総当たりといっても3チームしかありませんから2試合ずつ行いました。コートは、立大では室内コートを持っていましたが、当コートとスコットホールの屋外コートを夫々使い、商大ではアウトコートを使用しました。試合は中立のコートで行うこととしました。審判は、YMCA系統のひとにたのんだりしましたが、大体自分たちでやりました。アメリカのルールを翻訳してそのまま使用しました。

・第1回 大学籠球リーグ戦

最初の年は、1位は立教大で、早稲田大、東京商大の順で終わりました。3シーズン目に早大がゾーンディフェンスをモノにして初めて立大を破って優勝するまでは立大の

陣営は他を圧していたものです。翌13年（第2回）に中央大が入り、14年（第3回）に東大、明大が、さらにおくれて（第5回）慶大が加盟したのです。その後、東京工大、千葉医大、法大といったような各大学が加盟しチーム数が多くなりましたので、（第8回から）2部に分けてリーグ戦を行うようになり、それがさらに3部まで発展し、今日の盛大を見るようになったのです。

・創設時の各大学の状況

立教大学はまとまりのある立派なチームでした。それに当時としてはめずらしいイン・ドアの体育館を持っていました。メンバーは、Fに松崎（兄）、野村（弟）、松崎（弟）Cに横山、東城、Gに佐々木、野村（兄）七海、本居、剣持など。

早稲田大学は、浅野が中学1年の時からブラウン氏の直接指導を受けて（日本で最初のころ）来ましたのと、五十嵐（後に芋川と改名）が附属中学で少しやったことがあったので、当時の陸上競技部の有志と英語会メンバーを誘ってチームを作り、初めは私自身がコーチし早高講師だったスペンサー氏のコーチを受け、後にはF.H.ブラウンさんの指導を仰ぎながら練習してきました。それから2、3年遅れて、Fに浅野、五十嵐、鈴木、前田、Cに李、中山、Gに碓山、山岸、富岡、富田、山根など、更に片野、大庭、早川などが入ってきました。当時学院の校舎を建てた残りの材木でゴールを作ってもらい、天井の低い学生控室にそなえつけて練習に励みました。1924（大13）年秋だったと思いますが、早大野球部シカゴ大学野球部ノルグレン氏（同時にバスケットボールコーチ）から初めてゾーンディフェンスの指導をうけて相当な自信をつけたものです。又外人講師のアドバイスも受けました。

東京商大はやはりYMCAの影響を受けており、YMCAの主将だった薬師寺氏（東大OB）をコーチに招き、校技として全校がプレイする様な状態でした。Fに大須賀、田中、Cに加瀬、Gに阿部、桜井、少し遅れて大橋、植田、中村、高田などというメンバーが現れてきました。

中大、東大、明大は少し加盟が遅れましたが、森村、福井（中大）、鈴木兄弟、妹尾、大島、矢芝（明大）、小林、中川、川手（東大）などが夫々中心になってできたチームで、中でも東大の小林は既にYMCAの有数な選手として斯界でも認められていた人です。

慶大は、YMCA初代の選手である先輩が2、3人居られたにもかかわらず、チームが結成されずにいましたが、私の親しい英国人I. J. フィッシャー氏が慶大の教壇に招かれて行った当時から彼の肝いりもあってそこでチームが作られた、というのが実情のようです。上保、黒河内、山田などが中心でした。

・「全日本学生聯合」から「関東学連」への改名

とにかく未だ協会（日本協会）の無い頃とて、学生聯合の活躍範囲は広く、神宮大会の世話から各大会の管理など我々学生聯合の手で行っていました。「全日本学生聯合」の名も各地方に学連が出来て来たので、5、6年後には、関東学連と改名しましたが、その目的通り実になごやかで楽しく又同時に籠球界の指導役を完全につとめてきました。

・日本バスケットボール界の発展へ「学生と実業団」 浅野延秋の思いと期待

浅野は、現在の学連に対して大きな希望をかけています。バスケットボール競技の健全な発展のためには、どうしても実業団と学生の二大方向に素直に、而も活発に伸びて行ってもらいたいと思っています。特に学連の諸君は物にこだわらずおおらかに、あくまでも純粋な気持ちでお互いの愛するバスケットボールを十二分にエンジョイしながらプレイして行ってほしいと願っています。

- ・浅野は、日本のバスケットボール界の全国的組織「日本協会」の発足が10年遅れたと言っています。実業団と学生の組織が原動力になって日本のバスケットボールのけん引力になることを期待しています。YMCAの影響力を払しょくして「日本学生籠球聯合」の役員が主体となって1930年大日本バスケットボール協会の設立に至り、自分たちの手でバスケットボールの全国的組織をという浅野達の思いは達することができたと考えています。また、日本バスケットボール界を学生チームと実業団チームが牽引役となって発展することを願い、学連の発展に大きな希望を抱きバスケットボールを愛し、楽しみながらプレイしてほしいと願っています。

浅野延秋（1901－1969）

成城中学時代からバスケットボールをはじめ早稲田大学高等学院入学、1930年大日本バスケットボール協会の設立に尽力。1936年ベルリンオリンピック日本代表の監督、1963年世界選手権の日本選手団代表、1965年日本バスケットボール協会副会長などを務めた。

〈参考資料〉

- ・『バスケットボールのあゆみ 日本バスケットボール協会 50年史』（昭和56年3月）
- ・『60年のあゆみ』全日本大学バスケットボール連盟（平成21年6月）
- ・『バスケットボール23号』（昭和30年12月）
- ・『RDR』早稲田大学バスケットボール史（昭和58年2月）

以上

～ 新たな 100 年へ ～

関東大学バスケットボール連盟

2025 年 12 月 1 日



一般社団法人関東大学バスケットボール連盟
理事長 吉見 敬一

一般社団法人関東大学バスケットボール連盟は 2024 年（令和 6 年）創立 100 周年を迎えました。100 年の歴史に携わって来られた全ての皆さまに心からの感謝を申し上げますとともに、記念すべき年に理事長の大役を仰せつかったことは身に余る光栄です。

当連盟は、1924 年（大正 13 年）早稲田大学・立教大学・東京商科大学（現、一橋大学）の三大学により結成された「全日本学生籠球連合」が前身となります。1933 年（昭和 8 年）「関東大学籠球聯合」に改名され、1966 年（昭和 41 年）関東地方のリーグが統合され「関東大学バスケットボール連盟」が結成されました。その後幾多の変遷を経て 2016 年（平成 28 年）より「一般社団法人関東大学バスケットボール連盟」となりました。

2025 年度の登録校数は 108 校で、1・2・3 部リーグ各 12 校、4 部リーグ 24 校、5 部リーグ 48 校の体制となっています。少子化や新型コロナウイルス感染症等の影響で 100 校未滿となった年度もありましたが、バスケットボール人気の高まりやバスケットボール部強化を目指す大学の拡大等により登録校数は増加傾向です。

当連盟主催大会は、結成初年度の 1924 年（大正 13 年）に「リーグ戦大会」が、1950 年（昭和 25 年）に「選手権大会」が、1951 年（昭和 26 年）に「新人戦」が、それぞれ始まりました。2017 年（平成 29 年）には、主催大会への出場機会が少ない又は全くない学生に母校のユニフォームで公式戦に出場する機会を提供することを目的に「第 1 回 Development-league」が始まりました。

新たな 100 年のスタートとなる本 2025 年度主催大会は以下の結果となりました。

5 月、「第 74 回関東大学バスケットボール選手権大会（スプリングトーナメント）」では、日本体育大学が 3 年連続 23 回目の優勝を飾り、最多優勝回数を更新しました。

6 月、「第 65 回関東大学バスケットボール新人戦（ルーキーズトーナメント）」では、東海大学が 2 年連続 8 回目の優勝を飾りました。各チーム若手選手の成長が大いに期待されます。

8～11 月、「第 101 回関東大学バスケットボールリーグ戦（オータムリーグ）」では、早稲田大学が 57 年振り 6 回目の優勝を飾りました。2024 年度に 2 部リーグ優勝、本年度 1 部リーグ昇格し優勝と、見事に名門が復活しました。インカレでの活躍も大いに期待されます。

8～11 月、「第 9 回 Development-league」では、白鷗大学が初優勝を飾りました。毎年、オータムリーグに負けない白熱の試合が展開されています。

当連盟の上部団体である全日本大学バスケットボール連盟は2008年（平成20年）に一般財団法人となりました。

主催大会（男子）は、1949年（昭和24年）に大学日本一を決める「インカレ」が、1978年（昭和53年）に日本・韓国学生代表チームが対戦する「李相栢盃」が始まりました。1997年（平成9年）に全国9地区学生連盟（北海道・東北・北信越・関東・東海・関西・中国・四国・九州）選抜チームが競う「選抜大会」が始まりましたが、2018年（平成30年）第22回大会を最後に終了しました（当連盟選抜チームは22回大会中18回優勝）。2023年（令和5年）に、選抜大会に代わる新たな大会として「全日本大学バスケットボール新人戦（新人インカレ）」が始まりました。

主催大会（男子）の直近の大会結果は以下の通りです。

2024年12月、「第76回全日本大学バスケットボール選手権大会（インカレ）」では、日本大学が15年振り13回目の優勝を飾りました。第1回大会の慶應義塾大学から今回の日本大学まで、インカレ優勝チームは全て当連盟所属チームで占められており、決勝戦も76回中73回が当連盟所属チーム同士の対戦となっています。

2025年5月、「第48回李相栢盃日・韓大学代表バスケットボール競技大会（李相栢盃）」では、韓国代表が5大会連続優勝を飾りました。日本代表は優勝9回と大きく水をあけられており、今後の奮起が期待されます。

2025年7月、「第3回全日本大学バスケットボール新人戦（新人インカレ）」では日本経済大学（九州学連所属）が初優勝を飾りました。インカレ・新人インカレを合わせて当連盟以外の地区学連による初優勝となりました。

2025年11月29日～12月14日、「第77回全日本大学バスケットボール選手権大会（インカレ）」開催予定です。

この100年、大学バスケットボールを通して「知・徳・体」を育んできた数多くの先人達が、社会の発展に大きく貢献し、世間に幾多の感動をもたらして来ました。この積み重ねが、Bリーグ誕生やパリオリンピック出場等によるバスケットボール競技への関心・注目の高まりとなって表れています。

私は、「バスケットボール競技が社会や世間に必要とされてこそ真のメジャースポーツとなる。」との思いを持っています。新たな100年に向けて、これからも大学バスケットボール競技を通して「社会が求める人材の育成」に尽力して参ります。

引き続き弊連盟に対し、ご指導ご鞭撻のほどなにとぞ宜しくお願い申し上げます。

以上

会員だより



嘘のような、本当にあった話

(特別編、その11～)

元高校教諭 須田 武志

本寄稿は、滋賀県立膳所高等学校の男女バスケットボール班を長年指導された須田武志先生によるもので、前6号（初回97号、第2回98号、第3回99号、第4回100号、第5回101号、第6回102号）の続きです。 (編集部注)

特別編 ノーベル賞

① 朝永振一郎氏

私が大学に入学した1959(昭和34)年1月の学長は朝永振一郎氏であった。先生とは話もしたことないし、顔を見たのは入学式の1回だけであった。大学を卒業して2年後の1965(昭和40)年にノーベル物理学賞を授賞された。湯川秀樹氏に次いで、我が国で2人目の授賞で、2人とも京都大学出身で同じ研究室におられたとか。

② 坂口志文氏

今年の10月6日に滋賀県出身の坂口志文氏に、ノーベル生理学・医学賞の授賞が決まった。直接出会ったこともないし、名前も知らない。当日のNHKTVでノーベル生理学・医学賞の授賞の喜びのインタビューを受けている様子を見ていた。しばらくして、生家の様子と彼の実兄の様子が映し出された。TVに映っていた兄という人はどこかで見たことがある人だなあと思って、昔のことをいろいろと思い出していた。ひょっとしたら、その人は昔、私が勤めていた高校の先生ではないかと思い、その人の昔の住所を調べてみたところ、TVで伝えていた住所だったので、急いで電話を掛けた。直接、本人が出た。自己紹介して、授賞の喜びを伝えた。そして、約1時間ほど、昔話にふけた。彼(坂口偉作さん)は職場が同じで英語の先生であった。自宅は学校から遠く片道2時間近くかかるところに住んでいて、毎日、そこから通勤していた。最初、バスケットボール部の顧問になってくれと何回か依頼したが、学校から自宅まで遠いので、なかなか引き受けてもらえなかった。が、とりあえず、何もしなくてもよいから、名前だけよいからといって1年間の約束でバスケットボール部の顧問を引き受けてもらったことがある。同僚であったその先生の二つ下の弟さんがノーベル賞をもらったのだ。

この坂口偉作先生とノーベル賞をもらった二つ歳下の弟さんとの「父親」は、私が在学

していた高校の国語の坂口正司先生で、私は週1回の「漢文」の授業を教わった。漢文の授業の中味の記憶は全くない。今でもはっきり覚えていることは、『終戦直後に、当時オランダの植民地であったインドネシアでオランダ軍の捕虜として囚われていた「スカルノ」という人物を私が救い出した』という自慢話を毎回、授業中にうんざりする程聞かされたということである。今はそういう思い出しか残っていない。スカルノはのちにインドネシアで初代大統領になった人である。

その坂口正司先生が私の恩師でもあり、その先生の息子の偉作さんとは、同僚になった。恩師（坂口正司先生）の息子さんと同僚、そして同僚（ご長男・偉作さん）の弟（ご次男・志文）さんが、奇しくもノーベル賞をもらった。こういうことは中々起こりえない出来事ではなかろうか。

その 11. 第3回全国高校選抜優勝大会に出場 1973（昭和48）年3月

第3回全国高校選抜優勝大会近畿地区予選で、近畿2位で出場。

1回戦 膳所高校 30 対 51 広島商業高校 於 学習院大学体育館

近畿地区予選で2位という成績で、第3回全国高校選抜優勝大会に出場。ロースコアの得点で試合を戦ったのはよかったが、得点が入らず、30対51と、こっぴどくやられてしまった。若さのせいもあって無性に腹が立った。宿舎に戻ったあと「お前たち、自分らで勝手に（大津まで）帰れ」といって、学割と帰りの交通費をマネージャーに渡して、東京で解散。学校に戻って数日後、新聞を見たら、先日、試合をして1回戦で負けた広島商業高校がこの大会で準優勝していた。

その 12. 第4回全国高校選抜優勝大会近畿予選会で二度目の優勝

1974（昭和48）年3月

第1回全国高校選抜優勝大会近畿予選 1971（昭和46）年2月 橿原市橿原公園体育館

第3回全国高校選抜優勝大会近畿予選 1973（昭和48）年2月 京都市立体育館

第4回全国高校選抜優勝大会近畿予選 1974（昭和49）年2月 神戸市中央体育館

	レベルの高い近畿地区で優勝するということは、並みの努力でできるものではない。	
	1974（昭和49）年2月15～16日の神戸中央体育館での第4回全国高校選抜優勝大	
	会近畿予選に先立って、前日（2月14日）は授業を受けて、午後からは公欠をもらっ	
	て、ボタン雪の舞う中を後輩が勤めている県立芦屋高校体育館に行き、練習試合をし	
	た。試合の結果は、膳所高校48対56芦屋高校で完敗。明日からの近畿大会が思いや	
	られる内容の練習試合であった。「滋賀の代表として近畿大会に参加するには、あま	
	りにも恥ずかし過ぎる。今から荷物をまとめて、さっさと大津に帰れ」と生徒を叱り	
	飛ばした。	
	= = = = =	

○ 二度続けての奇跡の大逆転

この世に「奇跡」というものが存在するのだろうか？ もし、その奇跡が存在していてもその奇跡が同じ日に二度も立て続けに起きるということは、あり得るものだろうか。しかし、現実にはバスケットボールの試合中に、その奇跡が起きたのである。それも二試合続けてである。これは私の部活動の指導の中で、初めて経験したことであり、将来、このような試合は、もう二度と経験することはないだろうというものであった。まるで、TVの大型ドラマを見ているような、今にも息の詰まりそうな素晴らしい、しかし、ヒヤヒヤする試合であった。

結 果

予選リーグ 1974 (昭和 49) 年 2 月 16 日

- ① 膳 所 64 — 40 田 辺 (和歌山)
② 膳 所 64 — 61 洛 南 (京 都)

決勝リーグ 1974 (昭和 49) 年 2 月 17 日

- 34 — 27
③ 膳 所 71 (27 — 34) 69 初 芝
10 — 8 (延長)

前半 34 対 27 の 7 点リードで折り返すも、後半の初芝の追い上げに加えて、前日に 2 試合を戦った疲労が重なって、残り 7 分の所で、ついに 49 対 49 と同点に追いつかれ、見る見るうちに 49 対 53 と点差が開いた。リードしているチームが逆転されると、そのまま試合が終わることが多い。体力のない我がチームもそのうちの一つかなと思いながら、ベンチで眺めていた。この 4 点のビハインドのまま、とうとう残り時間 25 秒となった。

このとき、後半二度目のタイムアウトを要求。初芝が 4 点リード。しかも相手ボール。サイドからのスローインで試合が再開された。心の中では、もう万事休すと思ったが、選手にはそんな弱気な態度を顔に出してはいけないと思い、選手の体力のないことは十分に覚悟しながらも、「残り時間は 25 秒しかない。この 25 秒をとにかく死にもの狂い戦おう。今からオールコートゾーンプレスディフェンスで行こう。それから、ボールを取ったら、出来るだけ早くボールをフロントコートに運んで、少々強引なショットでもよいから、ファーストチャンスでショットへもって行け」と指示した。

ゾーンプレスディフェンスで相手のパスをうまくインターセプト。これをこの大会で攻防ともに全く振るわなかった八田光弘がリングの真正面から、いきなりジャンプショット。これが見事に決まり 2 点差 (今のルールなら 3 点ショット)。あと 1 ゴール。しかし残り時間はわずか 10 秒。相手のボール。ところがどうしたことか、初芝はここで落ち着いて攻めればよいものを慌ててパス。そのパスをうまく狙い撃ちして再びインターセプト。右 45 度から日野正教がジャンプショット。リングに当たったもののショットは外れ、強烈なりバウンドの奪い合い。このとき、オフィシャル席からタイムアップを告げるピストルの音とともに審判のアウトオブバウンズを告げる笛とが同時になった。このときのアウトオブバウンズは膳所ボール。しかし、これで試合は終了である。とうとう負けてしまった。59 対 61 で負けてしまった・・・。

59 対 61 で負けてしまったと思っていたところ、オフィシャル席に残分を確認に行った主審（京都の国際公認審判員・湯浅晴三氏）が、「今のピストルはオフィシャルが間違っ
て 1 秒早く鳴らしたので、あと 1 秒残っている」と説明。あとわずか 1 秒。あと 1 秒ぐら
いでは勝敗に影響はない。そう思いながら、ベンチに座って半分諦めていた。今度は膳所
のサイドからのスローインである。サイドからのスローインのボールをキャッチして体勢を
整えて、果たして 1 秒で正確なシュートが打てるだろうかと思いながら、ベンチに一人（ベ
ンチには選手以外に私の話し相手は誰もいない。全くの独りぼっちである）座って、最後
の 1 秒間に何か奇跡のようなことでも起りはしないか。何か大事件でも起きないか。大地
震でも起きて体育館が倒れないかとよからぬことを考えていた。天に祈るような気持ちで、
遠くのコートを見やった。

初芝の選手は、さすがにフロントコート内では簡単にはボールを持たせてはくれない。
一步でも二歩でも、リングから遠い位置でボールを持たせようとするのが相手のディフェ
ンスの作戦であろう。案の定、オフェンスが外へ外へと押し出された格好で、相当離れた
距離にして 7 m ぐらいの左 45 度あたりから、先程、ジャンプシュートを入れた八田光弘が
ボールをもらって右に小さくワンドリブルして（この場合、本当はワンドリブルしてはい
けないのだが）右側に倒れこみながら、ジャンプシュート。八田の手からボールが飛び出
した瞬間、ボールが空中にあるときにオフィシャル席から試合終了を告げるピストルの音。
そして、その直後、空中にあったボールが吸い込まれるようにバスケットの中に入って
いった。審判がカウントを告げる大きなジェスチャーを示した。59 対 61 が 61 対 61 とな
った。延長戦である。

延長戦に入ってから、起死回生とばかりに最初から我がチームが主導権を握り、延長
戦は 10 対 8。結局、71 対 69 の 2 点差で勝利が決まった。99.999%負けていた試合を何に
たとえたらよいのかわからないが、とにかく奇跡の大逆転で勝利することが出来た。

これで、一応、全国大会への出場権を獲得することが出来た。しかし、まだあと 1 試合
残っている。次の試合に勝って優勝して、東京に行きたい。

④ 膳 所 6 2 ($\begin{matrix} 34-36 \\ 28-23 \end{matrix}$) 5 9 市立御影工 (兵 庫)

御影工の監督は山田隆先生。国際公認審判員であり、策士家として有名である。

決勝リーグ 2 勝同士の戦い。この試合に勝った方が優勝、負ければ 2 位（全国大会には
出場できる）となる大切な試合である。御影工は地元という地の利を得てか、試合開始早々、
2 ゴールとフリースロー 1 本を立て続けに入れ。早くも御影工が 0 対 5 とリード。このあ
たりの数分間の攻防が最後の最後まで影響した。その後、膳所が得点して 1 ~ 3 点差に詰
め寄るが、すぐに得点されて引き放されてしまう。結局、34 対 36 で前半戦終了。

後半に入ってから残り時間が経過するだけで『このままずるずると時間だけが経過し
てしまって、数点差で負けてしまうのではないか。結局、近畿で優勝することは夢物語な
んだろう』と、ふと心に弱気がでた。

気分転換のつもりで、残り 5 分のところで、後半まだ一度も取っていないタイムアウト
を取ってみようと思い、タイムアウトを要求。同じ負けるなら、いろんなことをして負け
た方が、試合が後で後悔することもないだろうという思いが起きた。そしてタイムアウト

のときに、ここで思い切って今までやっていたマンツーマンディフェンスをやめて、ゾーンディフェンスをするよう選手に指示した。これが功を奏して。相手のセットオフenseでパスミスやショットミスが続出し、うまく相手の追加点を抑えることができた。折角よいゾーンディフェンスをやりながらも、奪ったボールを得点に結びつけることが出来ない。リードはおろか、同点にさえこぎつけることが出来ず、ただいたずらに時間だけが経過するだけだった。なんとかならないものかと一人ベンチで呟くものの、そう簡単に指導者の思い通りにはいかない。とうとう残り時間は1分14秒になった。この時の得点は、56対59。3点差で負けている。練習量は日本の高校生の中では最も少ない我がチーム。この際、そんなことはいっておられない。

ここは思い切って、今大会二度目のオールコートゾーンプレスディフェンスをするよう選手に指示。このゾーンプレスディフェンスが成功して、相手のドリブルをうまくカット。そして、取ったボールを1年の中山芳典にパス。そのままドリブルショット。58対59。あと1点。このとき、残り時間は34秒。『次のディフェンスを頑張って、相手のオフenseでなんとかミスさせて、ボールを奪って逆転を狙ってくれないか』と再び、天に祈る気持ちだった。何故か、このとき、相手の選手がダブルドリブルのミスをしてしまった。残り20秒のときである。膳所ボールでセットオフenseに持ち込んだ。『ひょっとして、このオフenseを得点に結びつけて、次のディフェンスを頑張れば勝てるんじゃないか』と欲が出てしまった。相手の小さな2-3ゾーンディフェンスを攻めるのには外角からのショットしかないと思ったので、今から3時間前にこの場所で起死回生のショットを放して気をよくしている八田光弘に「八田光弘にショットを打たせろ」と大声で指示。先程の試合のときと殆ど同じ位置から、同じく右へ小さくワンドリブルしてジャンプショット。先程と同じく、またもやボールが吸い込まれるようにしてバスケットに入った。60対59。ついに逆転に成功。1点リードである。ときに残り15秒。この試合が始まってから、39分45秒後にして、やっと1点リード。残り15秒。この試合が始まって、実に39分45秒後にしてやっと待望のリードが出来た。

初めてリードされて、慌てた御影工のオフenseに再びパスミスが出て、膳所ボール。このとき、残り10秒。ベンチから「ボールをキープ、キープ」と声が飛ぶ中で、焦らず、そして慌てず、残分を確認しながら、フロントコートでゆっくりとボールをキープ。残り2秒のときに副キャプテンの森博之がショットを打つ必要がないのに左外角から思いっきりジャンプショット。試合終了と同時に花を添えるかのようにゴールイン。このショットが入って、結局、62対59の3点差で辛勝。この大会で、二度目の優勝を飾ることが出来た。本当に39分45秒間、『じっと我慢の子』だった。先程の試合といい、今の試合といい、神業のようなプレーの連続であった。こういうのを「奇跡」というのだろうか。

終わりに

大会が終わってみたら近畿で優勝してしまっていた。しかも近畿地区での優勝は二回目である。不思議である

生徒数1,400人の学校で、バスケットボールコートが一面しか取れない体育館で、他の部（男女あり）との関係もあって体育館が思うように使えないことや、『勉強と部活動』を両立させながら高校生活を送らせるために、1週間に5日（日曜・木曜は休み）しか練習をやらせていない。選手個人個人を取り上げてみたとき、入学してくる部員の多くはモヤ

シのような、また、高山植物のような色白のひ弱な生徒たちが多い。それに加えて、学校自体が、大学進学希望者が 100%のため、毎晩遅くまで勉強している。そのため、長時間のハードな練習など、とてもじゃないけど課すことは出来ない。このような連中に果たして体力の必要なバスケットボールなんか出来るんだらうかと、いつも中途半端な気持ちを抱きかかえながら指導してきた。そんな中で、こういう結果になってしまった、優勝したことに対する嬉しさ以上に、何故こんなチームが近畿で優勝したのか。それも一度ならず二度までも。私自身複雑な心境であると同時に、いまだに信じられない不思議さでいっぱいである。

公立高校の普通科で、しかもリクルートの全く出来ない高校でありながら、近畿大会で二度にわたって優勝出来たことは、我ながら立派だと思う。強豪の洛南高校、初芝高校、そして御影工に勝っての優勝は立派である。過去、4回の全国高校選抜優勝大会の近畿地区予選で、3回の出場はよくやったと、我ながら、自分で自分を褒めなくなった。

石橋を叩いて渡るという格言があるが、[石橋を叩いてもまだ渡らない。ダンプカーか戦車を通して安全であるのを確かめてから石橋を渡る]、大袈裟に言えば、走ると疲れるから走らない。ショットを打っても入らないからショットしない。そういうバスケットボールを 38 年間指導続けてきた。

最近の高校では、どのスポーツ（高校野球、ラグビー、サッカー、バレーボール男女、バスケットボール男女等）も今や私学の大会のような感じがする。公立高校普通科は壊滅状態に陥っている。学区制があるため、学区外や他府県、あるいは海外から選手を受け入れることは全く不可能である。

この大会で優勝したメンバー（15 人）の中から卒業後に、弁護士・心臓外科医・工学博士 2 名が育った。

以前、1964 年の東京オリンピックの監督であった吉井四郎氏が、「バスケットボールには神さんがいる」と言っておられた。本当に、『神さん』がいるように思えて仕方がない。

第 4 回全国高校選抜優勝大会 1974（昭和 49）年 3 月 28 日 成城学園高校

1 回戦 膳 所 69 (25 - 36) 77 川 和 (神奈川)
44 - 41

その 13. 大学生と高校生の試合

○ 今年（2025 年）3 月の春休み

東京で、昨年のインカレ上位のチームである東海大、日体大、中央大、東洋大等と、同じく昨年の高校の全国大会トップの福岡第一、福大大濠による大学生と高校生の対戦試合が行われた。結果は大学生が勝つには勝ったが、殆どの試合は一桁の差であった。

大学生と高校生の試合というけれども、3 月のことなので高校は入学式も終わっていないので、この試合に中学 3 年生で早くも高校のチームに加わっている者もいた。しかもスタートメンバーで出場していて、他の高校生となんら見劣りするところが見られない。一時的とはいえ、大学生と中学生が試合をしているのである。日本のバスケットボールも大きく変わったものである。

○ 京都産業大学と対戦、大接戦の末に惜敗 1976（昭和 51）年 6 月 27 日

1976（昭和 51）年 6 月 27 日に滋賀県立体育館で開催された第 23 回近畿総合バスケットボール選手権大会でのこと。最近では、秋田の能代工が全日本総合選手権大会の一回戦で、大学のチームに勝ったり負けたりして、マスコミの話題になっている。そこまではいかないが、私の率いる膳所高校も、もう少しで滋賀の能代工になるところであった。京都産業大学は、6 月初めの西日本学生選手権大会で優勝したチームである。その京都産業大学に残念ながら 4 点差で惜敗した。

第 23 回近畿総合選手権大会 1976（昭和 51）年 6 月 27 日 於 滋賀県立体育館

一回戦 膳 所 × 5 3 — 5 7 ○ 京都産業大



第 23 回近畿総合選手権大会

1976（昭和 51）年 6 月 28 日 スポニチ

○ 京都大学と定期戦！！

私が転勤する前から、京都大学とは既に定期的に練習試合を組んでいた。本校のバスケットボール部の卒業生の吉田庄太が京都大学で活動していた縁である。当時、京都大学には体育館がなくて外で活動していた。2 か月に 1 回程度、本校のボロ体育館で練習試合をしていた。対戦成績は勝ったり負けたりで、ほぼ五分五分であった。

1971（昭和 46）年 1 月 8 日に、京都大学に 2 階建ての立派な体育館が完成したため、残念ながら、この交流はなくなってしまった。

○ ミシガン州の大学生と交流試合 1971（平成 3）年 5 月頃

日本で一番大きな湖である琵琶湖。その琵琶湖にミシガンから運んできた外輪船。これに乗船して、研修しているアメリカのミシガン州から滋賀にきている大学生たちと膳所高校バスケットボール部とが、バスケットボールを通じての国際交流を始めて、いつのまにか 10 年近くになった。当初、私は欲張って英会話の勉強をするつもりで安易に引き受けたが、彼らは日本人よりも流暢に日本語を話すので驚いた。こちらはなんの苦勞もすることなく、気楽に取り組むことが出来た。

毎週水曜日の夜、6 時～8 時までの 2 時間。交換留学生でバスケットボールに関心のある男女合わせて（年によって人数は違うが）10 人前後の大学生がバスケットボールを楽しんでいる。大学生と試合をしたり、入り混じって試合をしたりと週一回のこととはいえ、

ミシガンの大学生と膳所高校バスケットボール部との交流が深まり、今では立派な国際親善となっている。

その14. 秋田県立能代工業高校の話

前の前の本誌で、1979（昭和54）年8月に滋賀県でインターハイがあって、試合の会場なので体育館を使わせてほしいという依頼があって、体育館を貸したついでに本校の男子と高校の女子とで練習試合をして大敗したことを書きました。

今回は、誰もが知っている日本一の秋田県の能代工業高校の話です。

滋賀インターハイから2年後の1981（昭和56）年10月に、滋賀で国体（現、国スポ）が開催された。能代工業高校の監督の加藤廣志先生から、「貴校が能代工業高校の試合会場になるので、練習で体育館を使わせてほしい」と電話で依頼があった。私と加藤廣志先生とは、直接お話をしたことはなく、全く雲の上の存在の先生であったし、いつも遠くから眺めているだけの関係であった。能代工業高校のチームを見ることは、私にとっても部員にとっても大変よい勉強になると思い、即座に「OK」の返事をして、体育館を使って頂くことにした。生徒たちには二階から見学させた。

能代工業高校の部員（エントリーの12人）が更衣室で着替えている間に、マネージャー（男子）が私のところに挨拶に来た。そして、両手に二本のモップを持って広い体育館を隅から隅まで、隙間なく一人で走って見事に拭いた。その掃除ぶりは見事なものであった。その速早さといい、綺麗さといい、呆気にとられた。二階で見学していた生徒はこの光景を見て、どう思っただろうか。さすがは日本一のチームである。何をさせても日本一である。

私が何度注意しても聞かない事柄でも、マネージャーを含めて強い能代工業高校の部員の姿やプレーを見ることで、まさしく「百聞は一見に如かず」という言葉が当てはまった。僅かな時間であったが、本当にいい勉強をさせて頂いた。金輪際、このようなチームと試合をすることはないだろうと思っていたら、加藤先生から「折角だから、試合しませんか」という温かい言葉を頂いた。女子と試合して負けるようなチーム（このことは加藤先生はご存じない）なのに言葉をかけて頂き、喜んでお受けした。アップのあと、20分だけの試合をお願いした。当然、結果は散々なものであった。

2年前には、日本の高校2位の女子と試合をし、そして、2年後の今日は日本の高校男子トップのチームと試合が出来るということは、なんという神様の悪戯であろうか。

今後、公式戦では絶対に能代工業高校と対戦することはないだろう。能代工業高校と対戦するためには、その前に、まず、滋賀で優勝して全国大会に出場することが必須である。女子チームに負けているようなチームでは、到底、全国大会などに出場出来っこない。全国大会に出場できない以上、能代工業高校とは一生涯対戦することはないだろう・・・とそう思っていた。

<つづく>

訃 報

富田 洽一 氏 令和7年2月3日逝去 享年85

早稲田大学バスケットボール部、日立製作所（実業団）で活躍されるなど、バスケットボールの普及に貢献されました。

ここに謹んで哀悼の意を捧げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

大野 龍一 氏 令和7年8月1日逝去 享年85

NPO法人日本バスケットボール振興会の会長として、長年にわたり当会の発展に貢献されました。

ここに謹んで哀悼の意を捧げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

大野龍一君を悼む

都崎 修男



前振興会会長を君付けすることをお許し下さい。

年功序列のそれほどうるさい大学ではありませんでしたが、バスケットクラブに行けば名前を呼び捨てにするのは当然でした。特に私は大学卒業後も暇を見てはコーチの補佐として大学の体育館に行っておりましたので、彼に言わせると「最もうるさい先輩」だったようです。彼は決して器用なプレーヤーではありませんでしたが、背も高く体もがっしりしており一橋では珍しいゴール下の強いセンターでした。それだけに期待してすごいたのだと思います。

大学を出てからも東銀の女子チームの面倒を見ていたようで代々木の体育館などで顔を合わせるとすぐそばに来て挨拶をしてくれ、振興会の懇親会で久しぶりに会った時も私は大学を出てからもバスケットに関係している数少ない先輩だからとたててくれました。

最後に会ったのは一昨年東京で開催された旧三商大の定期戦の時でした。めったに会わないOB仲間とも分け隔てなく歓談しているのを見てまだまだ元気だと思っていたのですが、突然の訃報に驚いています。飾りのない人柄と明晰な頭脳の持ち主で、前振興会会長としても大学の有力OBとしてもまだ活躍する場はいろいろあったと思いますが、今はご冥福を祈るのみです。

合 掌

事務局だより

[事務局]

◇ 年会費納入に関するお願い

年会費の納入は、毎年度第2四半期末（9月末）までに下記口座にお振込みくださるようお願い申し上げます。

（令和8年度分の年会費は、令和8（2026）年9月末までをお願いいたします。）

なお、バスケットボールプラザ104号（次号：2026年6月末発行予定）発送時に郵便局の「払込取扱票（青色・金額未記入）」を同封いたしますので、その払込取扱票をご利用いただくこともできます。

振興会の活動は会員の皆さまの会費によって支えられております。

会費納入につき、ご理解ご協力をお願い申し上げます。

<年会費>

男性会員：1万円、女性会員：5千円（法人会員：5万円）

（月刊バスケットボール購読の方は、上記金額プラス4千円）

<振込口座>

○ゆうちょ銀行 00100-3-316035

NPO法人日本バスケットボール振興会

○三菱UFJ銀行 神保町支店 普通預金口座 1684743

特定非営利活動法人日本バスケットボール振興会

○みずほ銀行 丸の内中央支店 普通預金口座 1004687

特定非営利活動法人日本バスケットボール振興会

◇ 振興会ホームページ

2025年秋から事務局の運営管理体制を整えました。タイムリーな内容更新、情報提供に努めてまいりますので、積極的な閲覧をお願いいたします。

振興会ホームページ URL : <http://jbbs.jp>

右のQRコードを読み取ることでアクセスできます。




振興会 HP

◇ 2025年の活動

2025年の活動として、「振興会のあり方」について、前年度に続いて「検討委員会」を開催しました。「シニア大会の開催」「会員の拡大」「体育館の確保」「行政との連携の可能性」「JBAとの関係」などについて前向きに取り組む必要があると確認しました。

以上

プラザ こぼればなし

- ◇ バスケットボール男子「Bリーグ」は、2026 年秋に始まる「Bリーグ・プレミア」に向けてクラブの体質の変化・経営強化に進んでいる。過去の企業の福利厚生・一体化などを目的にした実業団（企業）が母体であったチームから収益を求める「稼ぐチーム」「収益化」が目的となり、他のプロスポーツ、イベントなどと競合することとなる。
 - ◇ 日本バスケットボール協会新会長 に、Bリーグ島田慎二チェアマンが選任された。任期は2年。「強い組織をめざす。積極的に投資をしながら、稼ぐ機能を強化していく」と抱負を述べた。
 - ◇ 開幕にあわせてBリーグは、(10/3朝日)新聞に「バスケットボールを愛するすべての人にありがとう」と掲載。2016年9月22日に日本男子プロバスケットボールリーグとしてBリーグがスタートしてから10年目、新たなステージに移行する。
 - ◇ 京都大学バスケットボール部では、11月15日の穏やかな秋晴れの日、創部100周年記念の式典がホテルオークラ京都で盛大におこなわれた。来賓、OB、OG、現役を含め220名を超える関係者が集まり、大正14年に始まった京都大学バスケットボール部のこれまでの歩みを振り返りながら100周年の重みを感じ合った一日であった。式典の丁度1週間前には京都大学の男子部現役が関西学生リーグ3部で全勝優勝し、入れ替え戦にも勝利して2部昇格を果たしたことも100周年の盛り上がりには花を添えた。また、式典では京都府バスケットボール協会の児玉幸長名誉会長のご挨拶があり、太平洋戦争の開戦直前、最後の東西対抗優勝決定戦が京都大学でおこなわれ、その後多くの選手が前線に赴きそして帰らぬ人になったお話を披露された。平和な世の中があつてこそ、バスケットボールができる幸せを参加者一同かみしめた一日でもあった。
- 
- ◇ Wプレミア (11/22)、トヨタ自動車アンテロープスと富士通レッドウェーブの試合は、富士通内にインフルエンザの感染が確認されたため、試合を中止。没収試合となり規定によりトヨタ自動車が20-0で勝ちとなった。
 - ◇ きこえない、きこえにくい選手のための国際スポーツ大会、「東京 2025 デフリンピック」(2025年11月15日~11月26日)が終幕した。バスケットボール女子は、決勝でアメリカに65-64で競り勝ち優勝した。想定の3倍の約28万人の観客を動員、国際ろう者スポーツ委員会が主催する東京大会は、100周年の記念大会であった。「全日本ろうあ連盟」と「東京都」が協定を締結し、競技、会場運営などは、東京都スポーツ文化事業団が担った。

- ◇ 少子化が加速する中、他のスポーツ界では、競技者の減少傾向対策として、様々な取り組みを行っている。野球界では日本野球機構（プロ）と日本高校野球連盟が共催する野球体験会「キッズファーストアクション」を開催したり、日本野球機構（プロ）と全日本野球協会（アマチュア）で構成される日本野球協議会が「全日本野球サミット」を開催している。相撲の力士は、全体で 600 人程度、ウクライナ出身の「安青錦」は人のつながりが相撲界に入るきっかけになったと報道されている。「バスケットを愛する人たちすべての人」に、各組織の「連携」「協力」が必要な状況にあると考えられる。
- ◇ 関東 GS 連盟から選抜された 70 歳以上の選手によるオールスター戦が、11/29、横浜武道館で、B2 の「横浜エクセレンス」対「神戸ストークス」の試合の前に行われた。最後まで白熱した展開で、1 点差で Team Black が Team White に 32-31 で勝利した。
- ◇ 「日本のスポーツ 100 年」のあゆみの歴史の中で、日本のバスケットボールの始まりを振り返ると、1911 年に大日本体育協会（現・日本スポーツ協会）が創立され、そのあと 1930 年に大日本バスケットボール協会（現・公益財団法人日本バスケットボール協会（JBA））が創立された。だが、1930 年の約 10 年前の 1921 年には、大日本体育協会主催で「第 1 回全日本籠球選手権大会」（現在の天皇杯）が開催されており、また 1923 年には、立教大学、早稲田大学、東京商大（現・一橋大学）の 3 大学による「学生聯盟」が結成されるなど、1920 年代が「日本バスケットボールの始まりの年代」と考えられる。
- ◇ 最近のバスケットボールの TV 中継の映像を見ていると、シニア世代の自分たちが実体験で経験した時代のルールとプレイに対する考え方や判断が変化（変更）している。見る者に対して楽しく変更するとか、さらにメディア側の要求などに対応しているような感じもする。審判の技量レベルアップも必須であるが、シニア世代としても「最新のルール」「変化（変更）しているルール」「新しいルール」を学び、理解する必要がある。そこで今号、小澤正博さんに、「最新の競技規則について」というタイトルを付し、わかりやすく説明していただいた。

以上

NPO法人日本バスケットボール振興会

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町2-20

新協ビル 304号室

電話/FAX (03) 5276-5801

メール contact@jbbs.jp

HP <http://jbbs.jp>



振興会 HP